

## 第19回 旧丹波口駅界限

### ■ 旧丹波口駅跡—今は児童公園

第18回でてきた西新屋敷児童公園を今回の起点にしましょう。いまは何の変哲もない児童公園ですが、『最新實測京都新地圖』二万分の一（一九〇八）（日文研の地図データベースに収録）を見ると、京都線（京都↔大宮↔丹波口↔二条↔花園↔嵯峨↔亀岡↔八木↔園部）の丹波口停車場（丹波口ステーション）がこの位置にあるのです。

京都線は、もともと京都↔舞鶴間の鉄道開設を目差して明治二六年（一八九三）に発足した京都鉄道が敷設を始めた路線です。明治三〇年（一八九七）に京都↔嵯峨間が開通し、今回の話に係のある地域には、同年に大宮駅（現在の塩小路大宮付近、一九一一廃止）と丹波口駅が開設されています。次いで、保津峠を通過するための難工事の末（この部分は、トロッコ列車として現在も観光目的で運行されています）、明治三三年（一九〇〇）には、京都↔園部間が開通。この会社は、明治四〇年（一九〇七）に、前年に施行された鉄道国有法により、国に買収されています。園部↔舞鶴間は明治四十三年（一九一〇）に、国によって完成。舞鶴に海軍の鎮守府ができたので、戦略的に重要になったため。

西新屋敷児童公園は、現在、正面通が突き当たったところに入

町名看板の所在（朱雀正会町界限）



り口がありますが、ここが丹波口停車場の入口。したがって、現在の正面通は、当時の駅前通りというわけです。多分、正面通の大門通以西の部分は、丹波口停車場ができたときか、そのときでなくてもそんなに経っていないころに新しく開かれたのでしょう。この推測が確からしいことは、正面通の一筋南の通り（西新屋敷公園の南面に沿った通り。これが島原の南限）が西新屋敷（揚屋町など）と朱雀正会町・夷馬場町との境界になっていることでもわかります。



西新屋敷児童公園



旧丹波口駅

丹波口停車場は、京都鉄道が国鉄山陰本線に変わっても、丹波口駅として、長く西新屋敷公園の位置にありました。この旧丹波

口駅は、山陰本線が高架になったとき（昭和五十一年（一九七六）に廃止され、現在の五条千本に移りました。旧丹波口駅の写真がないかと、インターネットを探したら、運よく「ゴミ・ブックス」のサイト（<http://www.asahahi-net.or.jp/~UG3H-ITKR/>）の「五条壬生川物語」という記事に収録されていました。どんな様子だったかを示すために、この写真をもとに描いた鉛筆画を載せます。

### ■ 猫間中納言と木曾義仲

『山城名勝志』巻五には、「猫間」の項があり、次のように説明されています。

#### ○猫間

平家物語長門本云、七條坊城壬生の邊をば、北猫間南猫

間と申候、是は北猫間に渡らせ給ひ候、上藪の、猫間の

中納言光隆卿也、壬生二位家隆ノ父、と申、云云、○（中略）○康富記云、

猫間島七條ノ坊門朱雀與ニ坊城ニ之、間 北類 號ニ猫間島ニ云云、

『山城名勝志』、大島武好、宝永二年（一七〇五）

『改定史籍集覧』二二卷、近藤瓶城編、臨川書店、一九八四

新加通記類第一八

（書き下し文）

#### ○猫間

平家物語（長門本）に云はく、七條坊城 壬生の邊を

ば、北猫間南猫間と申候、是は北猫間に渡らせ給ひ候、

上臈じやうらふかの、猫間の中納言ちゆうなん（光隆卿也、壬生二位家隆みぶににみいえたかの父）と申まうす、云云うんぬん、○（中略）○康富記やすとみきに云いはく、猫間島ねこまじま（七條坊門しちじょうぼうもん朱雀すざくと坊城ぼうじやうとの間あひだ、北類きたつら、猫間島ねこまじまと號かうすと云い云うんぬん、『平家物語』の猫間は、「七條坊城しちじょうぼうじやう壬生みぶの邊あたり」とあつて、この記述きじゆだけでは、場所ばしよをはつきりと特定ていていすることはできません。『康富記』の「七條坊門しちじょうぼうもん」は現在の正面通せうめんどうに相当さうたうしますので、『平家物語』の猫間ねこまじまが『康富記』の猫間島ねこまじまにあたるとすれば、「猫間ねこまじま」は西新屋敷さいしんやしき兒童公園じやうどこうえんの北東きたとうあたりに相当さうたうします。

この猫間に住んでいたと伝えられるのが、藤原光隆ふじわらのみつたか（大治二年〔一二二七〕）と建仁元年けんにげん（一二〇一）で、猫間中納言ねこまぢゆうなんあるいは壬生中納言みぶぢゆうなんと呼ばれ、後白河法皇ごしろくほふわうの近従きんじゆうとして仕えていました。『山城名勝志』に引用じゆうぎやうされている『平家物語』（長門本）では、猫間中納言ねこまぢゆうなんと木曾義仲きよむねの話わたりごととして、義仲きよむねが田舎者いんげしやまるだして、都人に疎うとまれるようになった様子ようすを活写かっかくしています。同様の記述きじゆが『源平盛衰記』にもありますので、引用じゆうぎやうしましょう。

光隆卿向みつたかきやう二木曾許ふたきよぎよ、付つきたり木曾院参頭きよむねいんさんとう事こと

（前略）猫間中納言ねこまぢゆうなん光隆卿みつたかきやう宣のたまふべき事ことあて木曾が許ぎよへおほして、先雑色まきざしきして角かくと云い入いられたり。木曾が郎等らうどうに根井ねいと云い者もの、聞継ききつぎて主ぬしに語かたげれば、木曾不ふ二意得ごえとくとて、なまり音ねにて、「何猫なにねこのきた、猫とは何ぞ、鼠ねずみとる猫敷ねこぢき、旅たびなればとらすべき鼠ねずみもなし、猫は何の料れうに義仲よしむねが許ぎよへは来るべき、但し人ひとを猫ねこと云い事こともや有ある」と云いければ、根井ねいもげに不ふ二心得こころえと思おもひ、立帰たちかへて雑色ざしきに問とは、抑おさ猫殿ねこどのとは鼠取猫ねずみとらねこか、人を猫殿ねこどのと申まうすかと、御料ごれうに不ふ二意得ごえとく

と噴給いかりたま也なり」といへば、雑色ざしき「あな頑かたや」をしへんと思おもて、「七条坊城しちじょうぼうじやう壬生みぶ辺あたりをば、北猫間きたねこま、南猫間みなみねこまと申まうす。是これは北猫間きたねこまに御座おはす程ほどに、在所ざいしよに付つて猫間殿ねこまどのと申まうす也なり。譬たとへば信濃国しんのうくに木曾きよむねと云い所ところにおはすれば木曾殿きよむねどのと申まうすやう、是これも猫間ねこまに御座おはす猫間殿ねこまどのと申まうす也なり」と細こま々に教おしければ、根井ねい意得ごえとくて此この様さまを申まうす。木曾きよむねも其時意得そのときごえとく奉けん入ざん二見参にみさんしけり。

『源平盛衰記』巻第三十三（国民文庫）国民文庫刊行会（一九一〇）

<http://www.j-texts.com/seisui/gsznb.html>

#### （現代語訳）

光隆卿みつたかきやう木曾の許ぎよに向むかう。付つきたり木曾義仲きよむねの院いんへの参上さんじやうが不首尾ふしゆゐにおわること。

（前略）猫間中納言ねこまぢゆうなん光隆卿みつたかきやうが知らせなければならぬことがあつて、木曾義仲きよむねのもとへいらつしやつた。まず使用人しやうじやうにんを遣つかわして、「このような次第しだいでうかがいました」と申し入れられた。木曾義仲きよむねの家来けらいの根井ねいというものが取り次いで、用事もちがらひを伝えただけでも、義仲きよむねは、「わからない」といつて、訛まがつた口調くちうで、「なに、猫ねこが来た。猫ねことはなにか。鼠ねずみをとる猫ねこのことか。遠征えんせいの旅たびなので、捕とらせる鼠ねずみもいない。猫ねこがなんのために義仲きよむねのもとへくる必要があるのか。ただし、人を猫ねこということもあるのか」といので、根井ねいも全くわからないと思おもつたので、たちかえつて、使用人しやうじやうにんに、「そもそも、「猫殿ねこどのとは鼠ねずみを捕とる猫ねこのことか。人を猫殿ねこどのと呼ぶのか」と、義仲殿きよむねどのはわからないとおつしやつて、怒いかつていらつしやる」と問とう

た。使用人は、「なんとおろかしい」とおもい、教えようとおもって、「七条坊城壬生辺を北猫間、南猫間と呼びます。この方は、北猫間に住んでいらつしやるので、住んでいるところに因んで猫間殿と呼んでいるのです。たとえば、信濃国木曾というところに住んでいらつしやるので木曾殿とお呼びするように、この方も猫間に住んでいらつしやるので、猫間殿とお呼びするのです。」と詳しく教えたので、根井もやつと理解して、この経緯を木曾義仲に伝えた。義仲も理解できたので、猫間中納言とお会いになることになった。

というように、木曾義仲の無教養ぶり、激高しやすい性質を強調します。さらには、このあと、猫間中納言を饗応することになるので、田舎流に大盛りの食事を出し、食事の間も「猫殿、猫殿」と呼び、少ししか手をつけない中納言を「猫殿は小食だ」と馬鹿にするような口ぶりで無遠慮に振る舞います。多分、猫間中納言は戻ってから、後白河上皇に、このような次第を報告したはずで、『源平盛衰記』の記述は、このことが、後白河上皇が木曾義仲を見限る一因となったことを暗示しています。

『山城名勝志』の割注にもあるように、猫間中納言こと藤原光隆ふじわらのみつたかの次男には、藤原家隆ふじわらのいえたか（保元三年「一一五八」）〜嘉禎三年「一二三七」）がいます。壬生二位と号し、新古今和歌集の編者の一人です。また、機会があれば紹介することにいたしましたしょう。

ところで、猫間というのは、どんな由来をもっているのでしょうか。日文研の地図データベースに『平安京往古絵図』

([http://tois.nichibun.ac.jp/chizu/santoshi\\_27.html](http://tois.nichibun.ac.jp/chizu/santoshi_27.html)) があります。その東鴻臚館ひがしこうらくわんのところに、「根小門」と添え書きがしてあります。この「根小」が「猫」と関係があるのかも知れませんが、さらに調査が必要です。

## ■ 豆之子稻荷

西新屋敷公園の前の通り（第18回で紹介した角屋の前、揚屋町の通り）を南に向かつて歩きますと、北小路通（中堂寺南通）に出る手前に、東側に続く路地があります。ここに、町名看板が一枚。「朱雀正會町」①。電柱に貼り付けてあるわりには、状態のよい町名看板です。



朱雀正會町 ①

北小路通に出て東に向かい、坊城通との変形十字路を過ぎたあたり（場所の記憶が定かでないので略図には載せませんが）、手書きとおぼしき「夷馬場町」（右上。左下はライオンズクラブの町名看板）の案内板が貼ってあります。このあたりには、これと同種の町名看板が多数あります。字の大きさや間隔が不揃いの

ところに味があり、多分篤志家か、あるいは町内会で貼ったものでしょう。

坊城通北小路上に、豆之子稲荷神社（豆子稲荷神社とも表記）があります。正面通と坊城通の十字路から南下するのは、少し西側にずれて坊城通が続くので、探しにくい。北小路通から坊城通を北上するほうがわかりやすい。民家に接した三角地にある



えびすのぼんばらよう  
夷馬場町

ので、境内は少々狭いが、手水舎てみずやもある手入れのゆき届いた神社です。

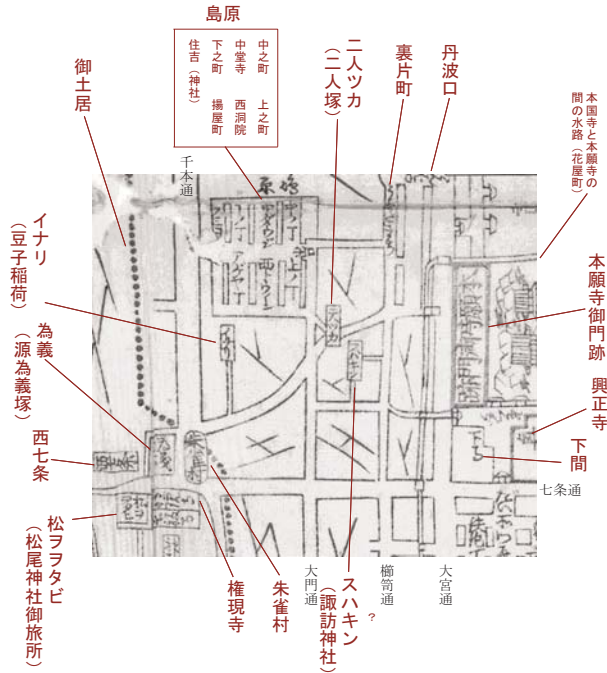


豆之子稲荷

第18回でもふれましたが、この神社は『京都指掌圖文久改正』（一八六二年）に「イナリ」として、ほぼ現在の場所にあることが示されています。日文研地図データベースより、一部を切り取り、加工したものを載せましょう。

『京都の地名』の「朱雀村」の項（明治一〇年代の『京都府

『京都指掌圖文久改正』(二八六二年)の丹波口付近  
(国際日本文化センター「地図データベース」より、  
一部を切り取り加工)



地誌』を引用)にも、「豆粉神社」としてでてきます。現在では、「豆<sup>まめ</sup>子」という名前から子供の様という事になっていますが、「豆<sup>まめ</sup>粉」の字面だと五穀豊穰を祈る神様ということになりますね。この方が、お稲荷さんのもともとの御利益との相性がよさそうにもおもいます。ちなみに豆粉とは、大豆を生そのまま粉にしたもので、一方、きな粉は大豆を煎ってから粉にしたものだそうです。

### ■ 江戸時代の千本七条(丹波口)

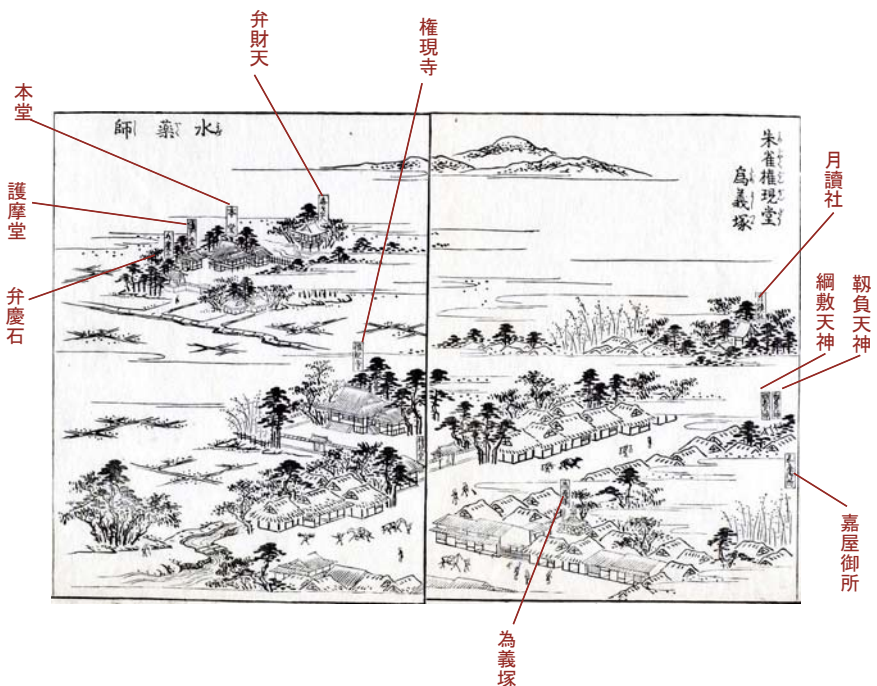
七条公共職業安定所千本労働分室(下京区朱雀止会町地内一〇二〇)が新築されるときに、発掘調査がおこなわれ、その結果が『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書』(二〇〇九―一)に「平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡」が報告されています。職安の新築地点は、北は北小路通、南は七条通、西は千本通、東は坊城通が囲む地域(左京七条一坊四町)の西南部に相当します。この報告書では、職安の新築地点が旧御土居の北行する堤部分にあたること、平安初期には、三町・四町(正面通、七条通、千本通、坊城通が囲む地域)には東鴻臚館があったことなどが述べられています。第18回で紹介した「東鴻臚館址の碑」の位置は、厳密にいえば、平安京左京七条一坊二町(正確には、朱雀大路の道路内)に相当しますので、すこしだけ北に設置されていることとなります。北行した御土居は、北小路通の手前で曲形に西に折れ、千本通と交差するところが丹波口ですが、山陰本線と京都市中央卸売市場の建設のために跡形もありません。

詮索の虫が動きだしたので、このあたりの地理上の変化を、入

手できた情報からできるかぎり再現してみましよう。上に切り取って引用した『京都指掌圖文久改正』の図のころ（江戸時代末期）には、六条丹波口から南下した丹波街道が、御土居に設けられた丹波口のところで千本通と合流し、さらに南下して七条通と交差しています。この交差した千本七条（朱雀村）の短冊のところ）を見ると、南に権現寺、北に為義（源為義塚）の短冊が書き込まれていることがわかります。

『都名所図会』の刊行された安永九年（一七八〇）ごろ（江戸時代中期）の千本七条の様子は、巻四 朱雀権現堂為義塚の図として描かれています。日文研の「平安京都名所図会データベース」より、該当の挿絵を引用します。この挿絵は、北東から南西方向を俯瞰した図ですので、左下から橋を渡って、斜め上に右端に至る通りが七条通で、橋の架かっている小川は、壬生川の下流でしょう。右下から斜め上に七条通に突き当たっているのが千本通です。この図の左下隅にある木立（七条通と小川を挟んで二箇所）は、御土居であろうと推測されます。橋の東手前から、木立（御土居）に沿った分かれ道があるように見えます。この図（江戸時代中期）と、『京都指掌圖文久改正』の図（江戸時代末期）と引き比べると、地形的には変化していないと推定できます。

『山域名跡巡行志』第四には、朱雀村の項があり、旅籠・煮売・茶店などが多数あったことが記されています。この案内記は、宝暦四年（一七五四）の刊行ですから、『都名所図会』の刊行よりもやや早い。次の引用は、前半は訓点文で、後半は書き下し文になっていますが、原文の雰囲気を感じられるだけ忠実に写し取ったものです。封疆は、御土居のことを差すのに、漢文流に形式張つ



『都名所図会』巻之四 朱雀権現堂為義塚の図。  
（国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」より引用）

て言い換えたもの。「朱雀村」の項には、月讀ノ社、松尾明神の御供所、嘉屋ノ御所、権現寺、源為義塚などが紹介されています。

朱雀村<sup>名</sup>（西七条村<sup>東</sup>、七條通西<sup>封疆</sup>外）丹波街道也。此所旅籠煮賣茶店等多。朱雀ハ古へ長安洛陽ノ中央ノ通ノ名。今千本通也。此地即七條朱雀也。今封疆ノ外トナリ洛外トス。

僧淨慧『山城名跡巡行志』、宝曆四年（二七五四年）

『新修京都叢書第十卷 山城名跡巡行志・京町鑑』 光彩社、一九六八

（書き下し文）

朱雀（村名）西七条村の東（七條通西、封疆の外）に在り。丹波街道なり。此の所、旅籠煮賣茶店等多し。朱雀は古へ長安洛陽の中央の通の名。今は千本通なり。此の地、即ち七條朱雀なり。今、封疆の外となり、洛外とす。

（現代語訳）

朱雀（村名）西七条村の東（七條通西、御土居の外）にある。丹波街道の起点。ここには、旅館や食事を出す茶店などが多い。朱雀とは、古く平安京における左京（洛陽）と右京（長安）の中央の通りの名称である。今は千本通という。したがって、この地は七条朱雀である。現在は、御土居の外になったので、洛外とする。

嵯峨天皇のときに、左京を洛陽、右京を長安と命名しましたが、時代が下って、右京が衰微したので、洛陽が京都の別称として用

いられるようになりまた。豊臣秀吉が御土居を築くに及んで、御土居の内部が洛陽とみなされるようになり、「洛中」の呼称が生まれました。したがって、御土居の外は洛外です。上記引用文の末尾「封疆の外となり、洛外とす」は、この意味です。

引用した『都名所図会』巻之四の挿絵には、瓦屋根と茅葺き屋根の混在した集落が描かれています。入洛する人通りから判断すると、七条通を直進するのではなく、千本七条（丹波口）で左折して北上するのが、主経路（六条丹波口への経路）であったようです。厳密に言えば、丹波街道は、御土居の開口部の丹波口から始まるはずなのに、現在の丹波街道町（丹波口通と大宮通の交差点）を起点としてこの丹波口に至る部分も、江戸期には丹波街道と呼ばれています。実際に、本シリーズ第17回と第18回で取り上げた「色道大鏡」の「坤郭野徑之圖」（藤本箕山『色道大鏡』巻第十二・遊郭図上。翻刻版、新版色道大鏡刊行会編、八木書店、二〇〇六、三五〇ページ）でも、丹波口大宮（六条大宮）から島原に至る道筋に「丹波海道」の名称を載せています（京都では、「街道」のかわりに「海道」がしばしば使われます。多分、「がいどう」ではなくて、濁らずに「かいどう」と読ませるための工夫でしょう）。これは、推測ですが、江戸期には、大宮通の西は市街地ではなく田畑が広がっていたので、「京から丹波へ旅立つのは丹波口大宮（六条大宮）のあたりから」という感覚があったのでしょうか。このため、現在の丹波街道町（丹波口通）の大宮通に面する丹波口大宮（六条大宮）のあたりが、丹波口と通称されるようになりました。実際に、今回部分図を載せた『京都指掌圖文久改正』（二八六二年）でも「たんば口」という記載があります。



これではややこしいので、区別するために六条丹波口とも呼ばれました。また、『山城名跡巡行志』第四の「朱雀村」の記載のあとに「丹波口」の項があり、「大宮通五条南、中道寺村也。封疆内皆記<sup>ス</sup>初巻<sup>ニ</sup>朱雀七條口<sup>ニ</sup>」<sup>七條口一</sup>という記載がありますから、もともとの丹波口を七条口と呼ぶこともあったらしい。

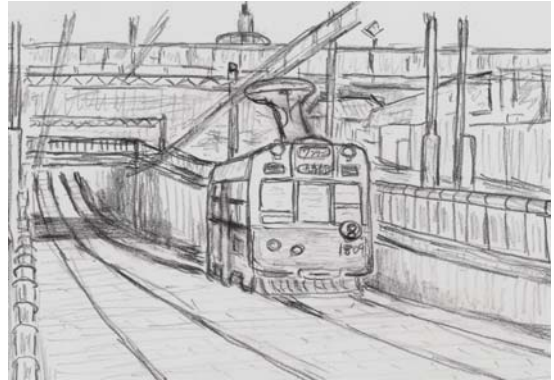
### ■ 明治時代以降の千本七条（丹波口）の変遷

千本七条の交差点付近は、梅小路機関区が設置されたためと、市電が開設・廃止されたために、その都度大きく変貌しています。主な出来事を、年表風に、列挙してみましょう。

- 1 明治三〇年（一八九七）に京都線が京都〜嵯峨間に開通したときは、御土居の開口部のところを線路が通っています。千本通は、線路の西側にあります。このとき、権現寺や為義塚は、移転せずそのままです。
- 2 明治四五年（一九一二）に、京都駅が南（現在の位置）へ移動したときに、現東海道線の線路が南に移動しました。それにともない、山陰線が西寄りに付け替えられた結果、線路にかかる権現寺や為義塚が、現在地（下京区朱雀裏畑町）に移転しました。
- 3 大正二年（一九一三）に梅小路機関区発足。翌年に、扇形車庫が完成（現在、梅小路蒸気機関車館として蒸気機関車の動態保存をしている建物）。
- 4 大正七年（一九一八）に、大阪方面から丹波口駅への連絡線

（山陰連絡線）が敷設され、現在の線路で挟まれた三角地の梅小路機関区の原型ができました。

- 5 昭和二年（一九二七）京都市中央卸売市場開設。このとき、千本通の丹波口〜七条通間が、市場内に取り込まれたものと推測されます。代替道路の千本通（現在の千本通）が線路東側に、また、新千本通が市場西側に作られたと推測されます。
- 6 京都市電についていえば、昭和二年（一九二七）七条線の山陰本線踏切東の七条千本まで、開業。次いで、昭和三年（一九二八）市電七条線の山陰本線踏切西に七条千本を移設。このとき、山陰本線を越えるため、千本七条の路面地下を開削して、市電を潜過させるための市電専用線が敷設されたと推測されます。昭和九年（一九三四）市電七条線の西大路七条まで完成。千本七条付近の地下立体交差の状態は、市電が廃止されるまで、長く続きました。この地下立体交差の概略を示すために、インターネットに掲載されている当時の写真から合成した鉛筆画を載せておきます。自動車などは、地上の踏切を通過するようになっていました。奥にみえるようにすでに山陰線が高架化されていて、京都タワー（昭和三九年〔一九六四年〕完成）が遠望できます。
- 7 昭和五年（一九七六）丹波駅の高架化。貨物用の地上線は、高架短絡線の西側を通り、京都市市場駅（二九八四廃止）に至っていました。
- 8 昭和五二年（一九七七）市電七条線の七条河原町〜七条西大路間を廃止。千本七条付近の地下立体交差は、開削部分を埋め戻して現在に至っています。



千本七条、市電の地下立体交差（一九七〇年代）  
市電廃止（一九七七）ののち埋め戻された。

現在、千本七条に立つと、山陰本線の高架の下で、なんの変哲もない交差点です。南に梅小路公園。この公園には、鉄道ファン垂涎の梅小路蒸気機関車館がありますので、のちの回で触れることにしましょう。

閑話休題。在りし日の市電を懐かしみたい方には、『京都市電最後の日々（上・下）』（RM Library 117&118）、高橋弘・高橋修著、ネコ・パブリッシング（二〇〇九）がおすすすめ。モーターゼー

ションの波におされて市電を廃止したのは、今考えてみると取り返しのつかない失政です。渋滞緩和を目的にしたはずなのに、市電を廃止しても道路の渋滞は現在でも深刻です。しかも、増えすぎた自動車の排気ガスの害は目に余る事態になっています。

## ■ 諏訪神社

次に、壬生川通以東、東は大宮通まで、北は正面通、南は七条通に囲まれた地域を訪ねましょう。まず、上で一部引用した『京都指掌圖文久改正』（一八六二年）に載っている諏訪神社を探します。

この神社への参道はたいへんにわかりにくい。七条櫛笥の十字路から櫛笥通を北上し、丁字路（東側は平安高校の裏）を左に折れて、北小路通を少しだけ西へ。北側の本願寺職員住宅と平安高校体育館（光顔館。飛び地になつていて櫛笥通を跨ぐ渡り廊下がある）の間に細い路地が開いています。その路地を北へ入ったところに、諏訪神社（下京区諏訪開町二九）が鎮座しています。北向きの石鳥居と「諏訪大社分社」と彫られた門碑とは、ごく最近（平成一九年）に建てられたもの。石鳥居を潜って境内に入ると、気の毒なくらいに狭いところに東面して本殿。西側に祓戸大神の扁額のかかった鳥居（というよりも門）があり、その奥には、多数の末社が祭られています。

諏訪神社から、正面通へ抜ける路地に、「七不思議諏訪神社参道」の看板。長野県諏訪の諏訪大社の「上社の七不思議」の中に、「蛙狩神事」があります。元旦に、冬眠中の蛙を捕らえて、生贄

町名看板の所在（諏訪開町界隈）



諏訪神社



として神前に供える神事。

そういえば、境内に蛙の置物が置いてあり、なんだろうともっておりましたが、諏訪から遠く離れた、この諏訪神社でも、「蛙狩神事」が継承されていた名残だとわかりました。

諏訪神社の参道（路地）を正面通に抜けたところに、町名看板「丹波口駅前通櫛笥西入裏片町」②が貼ってあります。東西の



諏訪神社七不思議



蛙狩神事の置物

通りの名前は、正面通ではなく丹波口駅前通となっていて、この看板が設置された当時は、丹波口駅前通という名前のほうが一般的であったことを示しています。

大宮通に面した東側のお宅にも、町名看板「大宮通丹波口駅前下ル大宮二丁目」③が掲げてあります。

このお宅の向かいは、西本願寺の裏手。土倉が連なっていま



丹波口駅前通 櫛笥 西入 裏片町②



大宮通 丹波口駅前 下ル 大宮二丁目③

す。現在の地名標示である「大宮正面」が電柱に懸かっています。土倉とともに撮影しておきました。

■ 幕末を駆け抜けた二人

■ 村田たか隠れ家

『京都大学附属図書館 維新資料画像データベース』

[http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/ishin/kanren/sonjo\\_index\\_shashin.html](http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/ishin/kanren/sonjo_index_shashin.html)

の「尊攘堂史料 No. 19/#11151」に、『京都維新史跡寫真帖（全48画像）』があります。その中に、「下京区島原駅前東入ル一貫町、村山かづえ隠家附近」と題された一枚の写真（画像番号3765066）があります。第17回で述べたように「一貫町通は下松屋通の別名。島原駅前（通）は、多分、丹波口駅前（通）のこと。この推定が正しいとすると、丹波口駅ができたのは、明治三〇年（一八九七）のことですから、この写真は、それ以降の撮影ということになります。



大宮正面（西本願寺裏手）

村山かづえは、村山たかのこと。多分、芸妓として座敷に出たときの源氏名でしょう。『京都維新史蹟』（京都市教育会、昭和三年（一九二八））には、「毒婦村山かづゑの隠家は、京都市島原驛東一貫町にあり」となっていて、ことさらに「毒婦」あるいは「淫婦」を強調していますが、これは「坊主憎けりや袈裟まで憎い」の類たぐい。昨今、作者の舟橋聖一の名前はほとんど聞かれなくなってしまうましたが、NHKの大河ドラマの一作目『花の生

涯』（一九六三）のヒロインが村山たかです。最終話（三九話）の題は、「たか女後日」です。演じたのは、淡島千景。

井伊直弼が断行した、日米修好通商条約締結（安政五年（一八五八）に勅許なしで締結）と將軍継嗣問題（南紀派を採り、一橋派を廃した）のやりかたに反対して、尊皇攘夷派や一橋派（水戸藩）の動きが激しくなり、これらの弾圧をおこなったのが、安政の大獄（安政五〜六年（一八五八〜一八五九））。すでに、日米和親条約（一八五四）などの締結がおこなわれているので、勅許の有無は些細なことのようなのだが、些細なことではなかったのは、その時代の趨勢。むしろ、不平等条約であったことが、あとあとまで禍根を残すことになりました。

井伊直弼を支えた長野主膳は、九条家侍の島田左近を通じて朝廷工作をおこないました。島田左近は、尊皇攘夷派の志士の検挙をおこない、安政の大獄に大いに協力して、絶大な権力をふるいました。村山たかは、長野主膳の密偵となり、京都における尊皇攘夷派の情報を送つたとされています。桜田門外の変（安政七年（一八六〇））で井伊直弼が暗殺されたのを機に、安政の大獄は収束しましたが、多くの人材を処刑したために、むしろ幕府の寿命を短くしたといえます。長野主膳は、井伊直弼の失政の責任を負わされて、文久二年（一八六二）に斬首されました。

島田左近は、文久二年（一八六二）に暗殺され、首は四条河原に晒さらされました。この事件からのち、「醜類共追々天誅に就く」という暗殺事件が多発しました。村山たかは、身に危険が迫つたため、この地にしばらく潜伏していましたが、同年捕えられて三条河原で生晒しとされました。のちに、洛北金福寺で尼として余

生を過ごし、明治九年（一八七六）没。

### ■ 島田魁旧宅

正面通大宮西入ル下大宮三丁目の路地は、新選組の数少ない生存者、島田魁さきがけが明治維新後に住んだところ。この路地の西側は、平安高校のグラウンドです。『靈山歴史館紀要』第七号（一九九四）に、多田敏捷りょうぜん「新撰組に関する新発見の文書、前川家文書と島田魁の戸籍簿」という記事があり、

下京区第廿九組大宮通  
戸籍簿  
大宮三丁目

という表題のある戸籍簿に、息子の島田魁太郎が戸主の戸籍が含まれていることが紹介されています。その戸籍には、父として島田魁、母として島田さくの名前が記載されています。母さくの実は、下京区第十七組突抜二丁目ですから、この戸籍の場所からすぐ近くです。

島田魁の最大の功績は、『島田魁日記』を執筆したことでした。これにより、当事者による新選組の詳細が後世に残ることになりました。日記の本文と訳が、『新選組日記』永倉新八日記・島田魁日記を読む、木村幸比古、P H P 選書 257（二〇〇三）として入手できます。

『島田魁日記』に従って、維新史の概略をおさらいしましょう。江戸から將軍警護のために下った浪士隊のうち、文久三年（一八六三）に近藤勇、芹沢鴨らは、壬生浪士隊として京都に残留。島田魁は、このころ、新選組（壬生浪士隊）に入隊と考えられます。

薩摩・会津と長州・尊皇攘夷派公卿との間の確執のために文久三年（一八六三）に「八月十八日の政変」が occurred しました。結局、長州・尊攘派が破れ、三条実美さねとみらの七卿落ち。このときの警護の働きにより、新選組の名を賜ったという記事が『島田魁日記』に載っています。

元治元年（一八六四）古高俊太郎を捕縛して、「長州藩士が三条大橋あたりに身分を隠して宿泊している」との告白をえて襲撃。これが世にいう「池田屋事件」（六月）。この事件で、長州藩士を捕縛・殺害したことが、新選組の初手柄となりました。近藤勇の隊と土方歳三の隊の二手に分かれて襲撃。近藤の方が早く池田屋に乗り込んだといわれています。島田魁は、土方にしたがっていたので遅れて乗り込んだため、『島田魁日記』には少し誇張が含まれています。

同年七月蛤御門の変（禁門の変）。敗走する長州軍の放った火により、京都は大火となりました。いわゆる「どんだん焼」です。ここから、長州征伐、長州藩の外国船砲撃事件、第二次長州征伐、慶喜の征夷大將軍就任。孝明天皇崩御。そして、慶応三年（一八六七）の十月には「大政奉還」。時局は大きく変化しました。

孝明天皇御陵衛士（高台寺党）を作って独立した伊東甲子太郎を襲った、油小路事件（慶応三年（一八六七）十一月、第15回参照）にも、島田魁は参加しています。しかし、この事件は『島田魁日記』では触れられていません。一方で、御陵衛士の報復により、伏見墨染で近藤勇が襲撃されたときには、護衛についていて、馬を駆って伏見城まで戻ったとの記載があります。

慶応四年（一八六八）には、鳥羽・伏見の戦。島田魁は、永倉新八とともに決死隊を組織して戦ったが、結局敗走。このとき、永倉新八を銃につかまらせて塀の上から持ち上げたという逸話が残るくらいの怪力。大阪で相撲取とけんかになったときに、相撲取を投げ飛ばしたという逸話もあります。ところが、これに似合わず、酒はだめで、極め付きの甘党。

その後、各地を転戦。最後は、土方歳三とともに、五稜郭で榎本武揚の指揮下で新政府軍と戦いましたが、五稜郭落城後、明治二年（一八六九）に降伏。尾張藩にお預けとなった三年間に『島田魁日記』を執筆しました。

明治五年（一八七二）に許されて、妻の実家のある京都に戻り、住んだところがここ。商売を始めたがうまくゆかず、剣道場を経営。明治十九年（一八八六）西本願寺の夜警となり、明治三十三年（一九〇〇）西本願寺で勤務中に倒れ死去。新政府への出仕の誘いも断って、節を曲げなかった気持ちは、わかるような気がします。

島田魁が甘党であったということで、この回のしめは、和菓子。七条通大宮西入ルの笹屋伊織は、享保元年（一七一六）創業の老舗。東寺の縁日（弘法さん、毎月二一日）に合わせて発売される「どら焼やき」で有名。どら焼といつても、いわゆるどら焼（三笠饅頭）ではありません。写真に示すように、棹物さざぶねで、あつさりした甘さが好ましい。



どら焼やき



（笹屋伊織）



## プロフィール

藤田眞作（ふじたしんさく）。一九四四年（昭和十九年）北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所 (<http://xyntex.com>) を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第19回）2010/07/21

© 2007, 2008, 2010 藤田眞作 <http://xyntex.com>